

氏 名	梶原 彰子
授与した学位	博 士
専攻分野の名称	医 学
学位授与番号	博 甲第 6774 号
学位授与の日付	2023 年 3 月 24 日
学位授与の要件	医歯薬学総合研究科 病態制御科学専攻 (学位規則第 4 条第 1 項該当)
学位論文題目	Evaluating the Coping Behavior of Children with Psychosomatic Disorders under Frustrating Situations Simulated Using the Rosenzweig Picture-Frustration Study (Rosenzweig Picture-Frustration Study を用いた心身症児の欲求不満状況下における対処行動の評価)
論文審査委員	教授 神田秀幸 教授 高木 学 准教授 寺田整司

学位論文内容の要旨

目的：心身症の発症や経過には、対人関係などの心理社会的要因が影響している。よって欲求不満場面での対処行動のアセスメントは治療を行う上で重要である。本研究では、Picture-Frustration study (P-F スタディ) を用いて小児心身症患者の欲求不満場面における対人関係および対処行動を明らかにすることを目的とした。

方法：2013 年から 2018 年に岡山大学病院小児心療内科を受診し、P-F スタディを実施した 126 名（男性 41 名，女性 85 名）を対象とし、各スコアを標準化データと比較した。

結果：集団順応度（GCR）は、心身症児と標準化データの間に有意な差はなかった。しかし、心身症児は I（言い訳）が有意に少なかった。

結論：心身症児は、欲求不満場面で年齢相応の常識的な対応をしている反面、自我を守る言い訳が少なかった。自己主張や主体的行動を促す働きかけが必要で、P-F スタディは有用である。

論文審査結果の要旨

心身症の発症や経過には、対人関係などの心理社会的要因が影響している。欲求不満場面での対処行動のアセスメントは治療を行う上で重要である。本研究では、Rosenzweig Picture-Frustration study (P-Fスタディ) を用いて、小児心身症患者の欲求不満場面における対人関係および対処行動を明らかにすることを目的とした。

対象は、2013-18年に岡山大学病院小児心療内科を受診し、P-Fスタディを実施した126名（男児41名、女児85名）とした。P-Fスタディの各スコアを標準化データと比較した。集団順応度は、心身症児と標準データの間に有意な差はみられなかった。しかし、心身症児は言い訳が有意に少なかった。この結果から、心身症児は、欲求不満場面で年齢相応の常識的な対応をしている一方で、自我を守る言い訳が少なかった。自己主張や主体的行動を促す働きかけが支援として考えられ、P-Fスタディが有用であることが考えられた。

委員からは、対象者の背景や国内外の同研究の動向について質問がなされた。対象者は市中病院と比べ大学病院を受診するやや難治性の患者がみられるが対象者特性に大きな差はみられず特徴的な反応を示した。また、対人葛藤場面での評価はP-Fスタディが用いられるのが一般的だが海外では小集団であり本研究のような100人を超える規模はみられず新規性がある旨の回答がなされた。発表は的確で、周辺知識の学習も十分に認められた。

よって、本研究者は博士（医学）の学位を得る資格があると認める。